

皮膚科のトリビア

189

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」, そこから転じて「瑣末なこと」となり, 今では雑学的知識, 豆知識, などを意味する言葉として定着している。

本欄は, 小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ, 連載しています。ご意見等ございましたら, ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第119回日本皮膚科学会総会から

令和2年6月6日

単純ヘルペスの型特異的抗体検査

単純ヘルペスの1型, 2型それぞれに特異的な抗体検査が保険適用となった。型特異性が高いHSVエンベロープ糖タンパク抗原の1つであるグリコプロテインG(gG)を抗原とした蛍光抗体検出法(fluorescence immunoassay:FIA)を用い, 型特異性が高い抗体検出が可能になった。これまでの中和抗体法(neutralization test:NT)より感度は良好で, 両者の鑑別に有用。

一言コメント

「標識抗体法について確認してみた。標識物質にはラジオアイソトープを標識している系が放射性免疫測定法(radioimmunoassay:RIA), ベルオキシダーゼ等の酵素を標識している系が酵素免疫測定法(enzyme immunoassay:EIA), ルミノール等の化学発光物質を標識している系が化学発光免疫測定法(counting immunoassay:CIA), ユーロピウム等の蛍光発光物質を標識している系が蛍光免疫測定法(fluorescence immunoassay:FIA)。型特異的な迅速抗原検出キットができるといいのだが。」

●第119回日本皮膚科学会総会から

令和2年6月6日

バリシチニブによるアトピー性皮膚炎治療

バリシチニブ(オルミエント®)は2017年7月に本邦でRAの適応が承認された内服のJAK阻害薬である。ステロイド外用薬を使用している中等症から重症のアトピー性皮膚炎にバリシチニブ2mg, 4mgを投与した。EASI 75を達成した患者の割合はプラセボ22.9%, 2mg投与群43.1%, 4mg投与群47.7%であった。IGAの2ポイント以上改善率はプラセボ14.7%, 2mg投与群23.9%, 4mg投与群30.6%であった。副反応はこれまでRAの患者で報告されているものと同様であった。簡便で有用な治療と思われる。

一言コメント

「2020年12月に保険適用になった。バリシチニブとして4mgを1日1回経口投与し改善があれば2mgに減量する。8週までに効果が表れない場合は投与を中止する。使用には日本皮膚科学会に導入可能施設としての届出が必要である。導入にあたっては結核, B型肝炎, C型肝炎のスクリーニングが必要である。」

●第119回日本皮膚科学会総会から

令和2年6月6日

アダリムマブによる
壊疽性膿皮症の治療

22例の壊疽性膿皮症にアダリムマブを0週に160 mg, 2週に80 mg, 4週以降に40 mgを毎週投与した。完全上皮化は6週で2例, 26週で8例であった。潰瘍の縮小率の平均は6週で-32%, 26週で-64%であった。ステロイド内服が使用できない患者の有用な治療法になりうる。

一言コメント

「壊疽性膿皮症(pyoderma gangrenosum: PG)はもともとRAや潰瘍性大腸炎に併発することもあるので、TNF- α をターゲットとした治療が有効なのだろう。ただし、術後や外傷後に生じる急性のPGではやはりステロイドが第1選択で、また、骨髓異型症候群に伴うPGに対して使用していいのかは現時点では不明とのこと。」

●第119回日本皮膚科学会総会から

令和2年6月6日

先天性表皮水疱症と変異復帰
モザイク

VII型コラーゲン遺伝子(COL7A1)の変異で生じる劣性栄養障害型先天性表皮水疱症の治療に関する話題。経過中に水疱を形成しない一見正常と思われる部位が現れることがある。遺伝子異常が後天的、偶発的に正常化した変異復帰モザイクで、皮膚生検でVII型コラーゲンの発現を確認できる。この部位を採取し、自家培養表皮ジェイスを作成、びらん面に移植すると生着、上皮化を誘導できる。QOLの大きな改善を期待できる。

一言コメント

「変異復帰モザイクを利用するという素晴らしいアイデア。2018年12月からはこれまでの重症熱傷、先天性巨大色素性母斑に加えて、栄養障害型および接合部型先天性表皮水疱症にも保険適用が追加された。ダイナミックな皮膚科の治療で感動した。」

●第119回日本皮膚科学会総会から

令和2年6月6日

Hailey-Hailey病にアプレミラスト
が有効

30歳代の女性とその同胞の20歳代の男性。腋窩、鼠径部、外陰部のびらんが季節変動なく持続。ゴルジ体の膜上に局在するカルシウムポンプをコードする遺伝子ATP2C1の変異があり、Hailey-Hailey病と診断。ステロイド軟膏外用で改善せずたびたび細菌感染を繰り返すため、QOLの障害あり。アプレミラストを2週間投与したところ、びらは上皮化し紅斑も褪色傾向となる。その後も内服を継続し、軽快を維持している。アプレミラストはHailey-Hailey病の治療薬として有用かもしれない。

一言コメント

「難治な場合には試みてもいいかもしれないと思った。ちなみになぜカルシウムポンプの遺伝子変異が間擦部の病変をおこすのかはまだわかっていないとのこと。」

●第119回日本皮膚科学会総会から

令和2年6月6日

乳幼児の急性出血性浮腫とは

6歳の男児。四肢に皮下血腫が多発。その後腹痛と陰嚢の疼痛が生じた。38℃台の発熱あり。四肢、頤部、両耳、陰嚢に浮腫を伴う打撲後に生じるような皮下血腫があり、右下腿には丘疹状紫斑が併発していた。皮膚生検の病理組織は真皮内の核破砕性血管炎で、真皮浅層の血管壁にIgAとC3の沈着がある。検査上、凝固系は正常、IgA正常、CRP、血沈、Dダイマーは上昇、第VIII因子は軽度低下。acute hemorrhagic edema of infancy (AHEI) と診断した。四肢と陰嚢の浮腫は数時間で消退。腹痛は持続しPSLの内服を要した。AHEIはIgA血管炎の亜型とされ、臨床像は激しいが一般的に予後は良好である。

一言コメント

「血管神経浮腫の仲間かと思ったら、IgA血管炎だった。乳幼児のIgA血管炎で陰嚢が腫れることは経験がある。打撲後の病変にも似ているので虐待との鑑別も必要だろう。」